



木材加工最前線

Contents

目次

◇木材高度加工研究所から

①秋田県での21年間を振り返って

木高研 所長 飯島 泰男 ……2

②エネルギー資源作物を研究した3年間

木高研 特任助教 山田 肇 ……3

・新所長に林知行教授

・木材高度加工研究所講演会が開催

・第64回日本木材学会大会での木高研の講演・発表 ……4

・木高研でエジプト人技術者が研修

・秋田県家具展に足立准教授が出品

◇木材加工推進機構から

・「秋田製材業界の活路を探る」意見交換会が開催 ……5

・飯島所長がエッセイ集を刊行

・飯島所長の最終講演会 ……6

・人事消息／推進機構事業をご利用下さい

木を学ぶ建築講座・スキルアップ研修

中大規模木造に要求される構造性能などを学ぶ

構造用集成材の製造ラインも見学



木材加工推進機構が平成21～23年度に県の委託を受けて開講した「木を学ぶ建築講座」では、「木材の特性を把握し、秋田県産材を活用したデザイン性の高い木造住宅を設計・建築できる技術者」として3年間で192名の修了者が秋田県木造建築アドバイザーの認定を受け、現在も住宅設計・建築の最前線で活躍しています。

本年度は、木造建築アドバイザーのスキルアップを図ることと、「秋田スギの家」供給グループの構成員や住宅を建築する大工・工務店、建築士等を対象とした新バージョンの「木を学ぶ建築講座」スキルアップ研修を秋田市のルポールみずほで開催しました。

第1回目(1月30日)は木造建築事例発表。県内で一般住宅や公共建築物の木造化についての講義を聞き、2回目(2月21日)は木を活かす推進協議会(木活協)との共同開催で、地域材の供給と活用のための仕組みづくり、中大規模木造に要求される構造性能や木質材料の選定・品質管理、防耐火基準と木造建築での対処方法などについての知識を深めました。

3回目(3月6日)は秋田スギの構造材を使っていく上で必要なツールとなるスパン表の活用方法を学んだあと、バスで移動して秋田駅西口の木造バスターミナルと五城目町の構造用集成材メーカー(株)宮盛で集成管柱の製造ラインを見学しました。研修には各回とも30名、延べ90名が参加しました。

秋田県での21年間を振り返って

木材高度加工研究所 所長 飯島 泰男



2014年3月末を以て「退職」ということになった。1972～93年の21年間が富山県の公設試、93～95年が秋田県庁「課長補佐」、95年以降の19年間が大学の研究所、ということなので、給料をもらって研究していた期間は県庁の2年間を除くと、ちょうど40年、前半は地方公設試、後半は地方大学の研究所ということになる。

3月4日、県立大で退職記念講演を行った。演題は「今でも記憶に残る言葉・あれこれ」。通常の最終講義らしからぬ内容であったと思うが、この40年余の中で遭遇した印象的な言葉を拾い、それが筆者の研究生活にどう反映してきたのか、といった視点で内容を組み立てた。

ただし、取り上げた「印象的な言葉」のほとんどが研究生活前半の富山時代のことになってしまった。最近のものは無いことはないのだろうが、忘れたのか、忘れたいのか、はたまた、そもそも覚えていないのか、まあ年寄りにはありがちの話、ということで、とお茶を濁してしまった。

無論、どんな仕事をしてきたかは、論文・報告書・学会発表等を検索すれば追うことができる。秋田に来てからの審査付き論文数は55報(うち筆頭7報)、建築学会での発表数は117報(うち筆頭19報)、著書は12件である。

開所前後の話は「15周年」のとき本誌60号(2010)に掲載されている。この頃の話は、そちらを参照していただくことにし、その後のほぼ20年間の筆者の仕事の履歴の改めて遺しておきたい。やや、典型的かつアリバイ的ではあるが、本誌への最終回としてはその方が相応しいであろう。

○

1995年の開所後から5年間くらいは、自分の専門領域に関連した仕事を中心だったように思う。

設立準備室時代に所内図書室に採用したスギとベイマツによる異樹種集成材を製造するにあたって収集したスギラミナのデータ、およびその後に行った県内各地の丸太性能の把握はいろいろな意味で基礎的なデータとなった。実際のデータ収集は小泉・岡崎・川井・佐々木(貴)の各氏によるものであったが、これによって県内のスギ材の強度特性を概観することができた。また小泉先生らと共著で「秋田県産スギ材の強度特性」と題した論文を5報、木材学会誌に投稿した。

この頃、住木センター「エンジニアリングウッド委員会」(委員長、1996～99)、「地域材性能評価委員会」(委員長、1998～99)、建築学会「木質構造の限界状態設計法」(1999～2003)、国交省「木質ハイブリッド総プロ」(SWG主査、1999～2004)、全国木工機械工業会「異樹種集成材製造システム開発委員会」(委員長、1999～2000)の各委員会などに出ている。住木センター版「木材強度試験法(初版)」をまとめたのは2001年である。また、県内限定の仕事としては「木橋」(秋田大学元教授の薄木征三先生との共同)、秋田県からの依頼で「土木用資材の耐久

性評価」、県立大の板垣直行先生と地域の古民家(旧峰浜村の手這坂民家)や伝統建築物の調査に行ったり、さらに県木連からの依頼による「県産材のスパン表作り」、県産材利用センターと共同での「乾燥材基準作り」への関与、研究所編の「木材百科」の出版などを行った。

2001年以降になると、筆者自身が研究に直接携わる機会は次第に減少し、所内外で収集された各種データを眺めながら、右から左に交通整理をしているだけ、といった感であった。また、そのキーワードも時代の要請とともにやや変わり、「環境」「地域材」「公共建築物」等々となっていた。

2003年から6年間、文部科学省の「都市エリア事業」などというのが舞い込んで、「室内環境」「環境負荷・LCA」「耐火」「森林資源」といった、やや場違いなところにも首を突っ込むはめになる。このうち「耐火」関係は2006年から現在に至る約8年間、早稲田大学の長谷見先生とご一緒の仕事させていただいており、先般の「木造3階建て校舎」の耐火実験、さらに現在も耐火部材の開発研究に至っている。また「環境負荷・LCA」は川鍋亜衣子先生・東大の清家剛研究室との共同で行った研究である。

木材学会研究分科会「地域資源活用型木造住宅の提案」(2005～06)、住木センター「地域材の物性・機能性データの整備委員会」(2008～10)などの主査も務めた。後者の成果物として「最新データによる木材・木造住宅のQ&A」と「木材の強度等データ及び解説」を木構造振興(株)から出版した。住木センターから「木材強度試験法」の改訂版をWEBで公開した。

最近では「学校の木造設計を考える研究会」(林野庁/文科省、2009～10)、それに引き続き「木造学校JIS検討委員会」(文科省)の委員会にも出ている。また、そのほか、学内では「院生・学生教育」の負担も次第に増え、教育にも関心を持たざるを得なくなってきた。そして2010年から3年間は木材学会として応募した「木のまち・木のいえ担い手拠点育成事業」の幹事を大分大学の井上正文先生と協同で務め、教育プログラムの構築を目論んだ。

2011年には「東日本大震災」勃発。所長になる直前のことである。

○

以上が筆者の研究関連の概略である。

どうも「この道一筋」というのとは程遠い21年間になってしまったようであるが、後悔はしていない。まだ続けてみたいテーマもいくつかある。

この間、ともに研究を進めてきた所内・学内の各位のほか、かつて木高研に所属していた小泉章夫(現:北大)、若島嘉朗(現:富山木材研)、盛田貴雄(現:高知森林研)、滝内 浩(現:コシイプレザービング)、澤田 圭(現:北大)、木村 彰孝(現:長崎大)、小林大介(現:横浜国大)、神戸 渡(現:関東学院大)、土屋 潤(現:福岡大)、千田知弘(現:福岡大)の各氏の協力も得た。ここに記して謝意に代えたい。

エネルギー資源作物を研究した3年間

木材高度加工研究所 特任助教 山田 肇



2011年4月から木高研に赴任して以来、3年の年月が経過しました。その間、秋田県の木材業界は、あくまで私見ですが、3つの大きな出来事を経験したと思われまます。1つ目は東日本大震災です。震災では、木材瓦礫の処理や仮設住宅の建設等の課題が発生しましたが、一方で、それらの課題を上手に解決すれば、海外への輸出産業となりうると思われました。2つ目は北秋田市バイオエタノール実証プロジェクトの終了です。木材から液体燃料の製造は時期尚早であったものの、FIT制度の流れもあり、木材直接燃焼からの売電売熱は今後着実に増加してくるよう思われます。3つ目は、円安による国産材価格競争力の回復です。木材業界に余裕が出た今こそ秋田木材業界の将来を見据えた布石を打つタイミングだと思われまます。

変動の大きかったこの3年間ではありましたが、私のやってきた研究の柱は「早生ヤナギ(ソウセイヤナギ)」についてでした。早生ヤナギは短伐期のエネルギー資源作物として近年着目され、下記の特徴があります。挿し木による容易な繁殖、高い収穫量、品種の多様性と品種改良の容易さ、刈り取り後でも再出芽する生命力の強さ、木本系であることによる熱密度の高さ、などです。また、早生ヤナギ栽培の大きな利点として、高回転率型の林業経営が可能であるということです。スギなどの樹木では植栽から素材生産まで数十年を必要としますが、早生ヤナギでは数年後の需要を見込んだ

木質バイオマス生産が可能です。木を植えてきたけれども50年経ったら経営上行き詰まってしまったということは避けられます。

私に関わった県大のプロジェクトでは、富栄養化した八郎潟残存湖の湖水を利用して早生ヤナギの栽培を行い、得られた木質バイオマスの利用法を開発するといったものでした。色々と実験した結果、早生ヤナギはボードの原料として物性上問題ない、腐朽菌に弱くて耐朽性に問題がある、樹皮率の高さがさまざまな影響を与える、リンや重金属を土壌から吸収する環境修復資材として優秀である、薬品を生産する生物変換原料として有用であるといったことが分かってきました。

早生ヤナギは、燃料用としては既に実用可能であるという先例があり、欧米はもちろん日本でも数カ所で大規模栽培が開始されています。バイオマス発電所の数が増えつつあり、燃料用チップの需要は大幅に増加傾向にあることから、秋田でも、誰が最初にエネルギー資源作物の栽培に手を上げるか、待っている状況だと思います。ただし、これまでの早生ヤナギは平地での栽培が前提条件であり、山間の傾斜地で収率がどの程度になるかということは検討されなければなりません。

最後に、本稿は3年間の決算として書いておりますが、私は木高研でまだしばらく、博士研究員として勤務します。

「木材のメカノケミカル処理」が次の研究テーマで、社会に還元できるような成果が出るよう努力したいと思っています。

新所長に林知行教授



秋田県立大学は昨年12月27日、木材高度加工研究所の新所長に、農学博士で木高研教授の林知行氏を選考したことを発表した。林教授は5代目の所長となり任期は今年4月1日から2年間。

新所長に就任する林教授は、大阪府堺市出身で、昭和57年京都大学大学院農学研究科林産工学専門課程博士課程修了。農林水産省林業試験場(現独立行政法人森林総合研究所)に入所、接合研究室長、構造利用研究領域長、研究コーディネータを歴任し昨年3月退職。木造住宅コンサルタント・木構造振興株式会社 客員研究員を経て、昨年8月木高研教授に就任した。

専門分野は木質材料、木質構造。森林総研時代に、木材学会賞、材料学会論文賞、杉山英男賞を受賞している。最近の研究テーマは、難燃材料の開発と燃焼の確率的特性の解明、木質材料の長期耐久性とその劣化メカニズムの解明など。

2月12日に木高研の講演会

CLTや木質バイオマスの利用に向けて

県内外から関係者など80名が参加



木高研の平成25年度講演会が、2月12日に能代市のキャッスルホテル能代で開催されました。恒例となっている講演会には、県内外から林業・木材関連業界、建築・設計、行政、試験研究機関関係者など約80名が参加して講演に耳を傾け、質疑応答による意見交換を行いました。講演会は、秋田スギなど木質資源の利活用に関する最新情報を提供し、関連業界との共同研究や研究成果の技術移転、新製品開発の促進などを旨として能代市、木高研、木材加工推進機構が主催。今回は、国産のスギ材を有効利用するための切り札的な新材料として注目を集めているCLT(直交集成板)について、林知行教授が中大規模木造建築で利用していく上での技術的な課題として大断面製材の規格化、製造・利用方法、耐久性や維持管理、コストなどを挙げ、適正利用の促進に向けた取り組みなどについても紹介しました。

また、「木質バイオマスエネルギー利用の現状と今後の課題」のテーマで特別講演をおこなった沢辺攻岩手大学名誉教授は、木質バイオマスのマーケットの現状や固定価格買取制度で導入が進むバイオマス発電について概観しながら、今後のバイオマス利用のあり方について提言や課題を語りました。

第64回日本木材学会大会（松山 2014.3.13～15）での木高研関係の講演・発表

《合同企画講演》	
木材強度研究の視点からみた地域材研究の課題	飯島泰男
《口頭発表》	
3次元モデルによるスギ根元曲がりの肥大成長の解析	小林慧、高田克彦ほか1名
放射方向に圧縮した木材の圧縮弾性	竹村望、足立幸司ほか1名
圧縮木材を用いた複合梁の曲げ弾性	平野葵、足立幸司ほか1名
伝統工法における接合部における割裂耐力の推定—蟻継ぎの引張り	中村昇
10ヶ月間水中貯木処理したスギ材の気体透過性と乾燥性の関係	川井安生ほか4名
ブーストラップ法を用いた仕上がり含水率データの評価—平均値の信頼区間の推定	渡辺憲、林知行ほか2名
天然秋田スギの曲げ特性の解明と曲物加工への応用	足立幸司、高田克彦ほか1名
アモルファス炭素コロイド溶液の木材の表面保護特性	山田兼寛、足立幸司、山内秀文、栗本康司
接着剤の微量塗布技術を適用した薄単板積層材料の開発(Ⅱ)—薄単板積層材料の合理的製造技術	山内秀文、足立幸司ほか1名
MDFの特性分布に及ぼす屋外曝露(17年間)の影響	林知行ほか2名
短伐期ヤナギの総合利用(Ⅳ)—早生ヤナギの逐次抽出物と抗蟻性能	山田肇、山内秀文、栗本康司ほか2名
高速摩擦による木材表面の平滑化処理における形状転写性	飯田隆一、足立幸司ほか2名
《ポスター発表》	
スギ雪害抵抗品種「出羽の雪」の成長と材質Ⅱ	小林慧、高田克彦、長谷川陽一ほか2名
高速摩擦条件を利用した木材表面の超平滑化処理	飯田龍一、足立幸司ほか2名
木杭基礎を用いた多自然型護岸工の実証試験	佐々木貴信、清水光弘ほか5名
ボールミル粉碎機を用いたアセチル化木粉の調整Ⅱ	阿部一徳、栗本康司、高田克彦
高速試料粉碎機を用いたベンジル化木粉の熱的特性	斎藤健志、山田肇、栗本康司
紫外線照射が針葉樹葉油の構成成分に与える影響	楠本倫久、澁谷栄
腐朽木材の打音特性の解析(Ⅱ)—腐朽木材を使用したモデル壁・床の打音特性	岡崎泰男
ヤマトシロアリによる蟻道伸張アッセイの開発	山田肇、澁谷栄、栗本康司
水溶液系におけるセシウムイオンの木炭への吸着現象(Ⅱ)—共存する1族及び2族元素イオンの影響	山内繁、山崎崇之、桐越和子ほか1名

4千年前の考古遺物の修復・保存へ

木高研でエジプト人技術者が研修

木材の特性やメカニズムを学ぶ

独立行政法人 国際協力機構(JAICA)が支援するエジプトの文化財を守り育てる専門教育成事業の一環として、エジプト考古遺物の保存修復作業に関わる技術者7名が2月12～14日の3日間、木高研を訪れ、木材の特性やメカニズムについて知識を深めた。



木高研では、文化遺物など出土木材の保存処理を研究テーマの一つとしている栗本康司教授が、遺物修復をおこなうために必要な木材について、スライドや木材を示して基礎から講義した。

講義で得られた知識や技術は、4千年前の考古遺物を主体に展示する「大エジプト博物館」(2016年に完成予定)の展示物の修復や保存・管理などに生かされる。

第56回秋田県新作家具・インテリア展

新素材の「やわらかい木」と「木製パネ」を活用

木高研から初出展

3月21日～24日の4日間、秋田市のアトリオンイベント広場において第56回秋田県新作家具・インテリア展が開催されました。協賛展示として木高研が初出展し、これまでに開発した新素材である「やわらかい木」と「木製パネ」を活用したツール3点を展示しました。「やわらかい木」は薄板をゴム系接着剤で接着することでこれまでの積層合板よりも柔軟であり、低反発ウレタンのような座り心地を体現できる特徴があります。「木製パネ」は、つづら折り状に薄板を接合することでコイルパネのような変形を可能にするものであり、遊具やおもちゃ等への利用が期待されています。

会期中は本展示品に触れた方々は老若男女を問わず驚き、笑いがあふれ、木製品の新しい魅力が伝わったようで大変うれしく思いました。当展示品は木高研に常設展示しているので体験可能です(准教授:足立幸司)。



国産材産業の新展開に向けて
推進機構顧問の西村勝美氏と意見交換

製材業者など25名が参加

消費増税前の駆け込み需要で住宅建築が旺盛になり木材利用ポイント制度の始まりで国産材への切り替えが進むなど、その影響で木材関連業界も活況を呈している。しかし当然のことながら、かつて消費税が上がったときのように反動減は想定しなければならず、今後の人口構成や住宅のストックなどを考えれば、マーケットの縮小は避けられない。

そうした中で、秋田県は人工林の蓄積と面積が国内トップクラスであり、その有効な利活用が大きな課題となっている。秋田の製材業はこれからどのような方向に活路を見出していけばいいのかを考えていく必要がある。

2月5日、秋田市のルポールみずほで秋田県内の製材業者に呼びかけ、木材加工推進機構の顧問である西村勝美氏(東京:木構造振興株式会社代表取締役)を招いて「国産材産業の新展開に向けて——木材マーケットの構造的変化にどう対処するか」をテーマとして話題提供してもらい、参加者との間で意見交換をおこなった。

西村顧問は「住宅の需要者は40歳前後になってきており、木材はよい材料で安い価格」のものが求められる。しかも買手市場。一方、地場では地域材のニーズが高まっているが国産材の製材品シェアは40%にすぎないと述べながら、国産材製材の実情については、高速製材でコストの削減が進んでいる、木屑炊きボイラーの導入を含めて乾燥技術が向上した、小径丸太の集成材への利用が拡大した、大手商社が合板用原木など国産材の扱い量を増やしているなど、ここ数年間での変容ぶりを語った。

今後の国産材製材業界については、既存大規模工場の増産設備投資にはかげりが出てきているとして、「大規模工場間の本格的な競争時代に入る」と明言。その際には、原木の安定確保、製品の品質・性能、経営コスト)が決め手になり、設備投資額の償却期間の差が問われ、プレカット流通と住宅産業にどこまで接近できるかがポイントになるだろうと結んだ。

参加者との意見交換では、各産地でのスギ大径材利用の取り組みが報告されたほか、「国や県の補助金で設備投資したが、生産量(原木消費量)の増大というハードルを越えるために全径級を挽かなければならず、そのことが重荷だ。何か特効薬はないか」「昨年秋から原木価格が高騰したが、その分は素材生産業者や流通市場に吸収され、山元の立木価格には反映されていない」「冬場の雪と寒さで原木が凍結して生産効率が下がる。この克服のためにも国や県で補助事業を新たに作るべき」などといった意見や質疑が相次いだ。



鉄道・音楽・落語—そしてちょっぴりまじめな話

『木都徒然(つれづれ)通信』

飯島所長が退官記念にエッセイ集を刊行

趣味はと聞かれてためらうことなく「鉄道、音楽、落語」と答える広角打法の木材研究者・秋田木高研の飯島泰男所長。3月末の退官を記念して縦横無尽・軽妙洒脱なエッセイをまとめた『木都徒然(つれづれ)通信』を秋田文化出版から刊行した。

「木都・能代市の木材高度加工研究所を立ち上げるために来秋して20余年、お堅い理系研究者のイメージを裏切るユーモアに満ちた文章。大好きな鉄道、クラシック音楽、落語、映画をはじめ、趣味の話から地球環境問題まで幅広い話題と豊かな語り口で贈る41編+富山時代の抱腹絶倒エッセイ8編」(表紙の帯より)を盛り込んでいる。

表紙カバーと口絵の写真はいずれも鉄道・蒸気機関車などいかにも「鉄ちゃん」らしさをうかがわせる。退官が近くなったころの飯島所長は相も変わらぬ多忙な身でありながら、講演のお呼びがかかるごとに丁寧にパワーポイントで資料を作成していた。その1枚目には蒸気機関車が向かってくる写真、そしてラストの1枚には機関車が去って行く写真を好んで(?)使っていた。

読んで飽きない随想集だが、本人は「とくに思いを込めて書いたのは『小樽運河を散策して』と『登録文

化財とは何か』の2編」と語る。これは随想の範疇を超えていて、地方の小都市の施策を変える契機となった文章である。文章の力、ことばの威力というものを感じさせる。

とくに後者は地元新聞で能代市の議会議事堂を取り上げたものだが、自ら申請して登録文化財にしたものを自ら取り下げて議事堂を取り壊そうとする能代市議会の迷走・撞着ぶりを嗤ったものとして記憶に残る。結果、能代市議会議事堂は解体されることなく市民の前に残ることとなった。

退官を目前にしたある会で飯島所長は「その時その時の思いを文字にして、ことばにして文章として自分のために残せ」ということを何度か言っていた。後輩、後進への重みを持ったものとし正面から受け止めたい。



『木都徒然(つれづれ)通信』は四六版・227ページ。秋田市山王7-5-10の秋田文化出版から求めることができる。本体1,500円+税。

電話018-864-3322 FAX018-864-3323

飯島所長の最終講演会が開催されました

「木材研究40年の歩み」を語る

JAS製材やスギ大径材の利用が課題

全国から研究仲間など100名が聴講

3月末で定年退官を迎える木高研の飯島泰男所長・教授の公開講演会が3月22日に木高研研修室で開催されました。演題は「木材研究40年の歩み」。講演会には木高研の研究者やスタッフ、全国から駆け付けた研究仲間や木材・建築設計関係者など約100名が聴講しました。

飯島所長は富山県木材試験場研究員から平成5年に木高研設立準備のために秋田県林務部木材産業課課長補佐として招かれて着任。7年に県立農業短大(現:秋田県立大学)木材高度加工研究所が

設立されると同時に教授となり、23年に木高研4代目所長に就任した。専門は木材・木質材料・木質構造の開発と性能評価・流通生産システム。



講演の中で飯島所長は、構造用集成材の研究、スギ小径材の用途開発、大規模木構造研究への参画など40年間の研究の内容を紹介しながら「秋田に来て21年、木高研教授として19年、所長になって3年、各界各層の皆さんにお世話になった」と感謝の言葉を述べました。

研究分野の中から、地域材とJAS製材の課題について日ごろの考えを述べたほか、秋田のスギ資源についても言及し「おおむね20年後には径級30～36㎝上の大径材が多く生産される。これをどう製材してどう利用するかは次の世代に課せられた問題であり、これを研究しないと秋田スギの将来の話はできない」と強調。

併せて確実に減っていく住宅需要に対して、今後は国産材の産地・企業間競争が激化すると予測し「それを勝ち抜く生産・供給側の戦略構築に向けた取り組みが重要となる」と述べ、退官記念講演を結びました。

人事消息

渋谷マネージャー兼総務管理チームリーダーが子育て支援課へ

木高研総務管理チームの渋谷清美マネージャーは秋田県の4月1日付け定期人事異動で県庁へ復帰し、子育て支援課調整・子ども育成班の副主幹へ転ずることとなりました。「東日本大震災があった年に木高研に来て3年。至らぬ点が多かったと思うが、飯島所長ほか先生たちははじめ皆さんのお世話になった。新しい職場でも頑張りたい」と語っています。マネージャーの後任には建設政策課の菅原修さんが発令されました。

齋藤健志スタッフは林業木材産業課へ

木高研スタッフの齋藤健志さんは4月1日付けの県の人事異動で秋田県庁林業木材産業課の調整・企画班主任に転ずることになりました。木高研での2年間について「研究者は行政の担当者と同じレベルで話ができることを知った。もっと広い視野で日本や世界を見なければならぬことを感じた。新しい職務は木高研とのつながりもあるので、よろしく厚誼をたまわりたい」と述べています。

阿部一徳博士研究員は秋田大学へ

木高研博士研究員の阿部一徳さんは3月末で退職し、4月から国立大学法人秋田大学大学院国際資源学研究科の博士研究員に就任することになりました。「数ヶ月間の短い勤務であったが、木高研では垣根のない自由な雰囲気での研究をさせてもらった。秋田大学でも石油貯留工学に関する流動試験を通じ、地域の活性化に向けた研究を続けたい」と抱負を語っていました。

オクム・ゴードン・ワニヤマさんが特任助教に

3月1日付けで北海道北広島市の教育委員会からウガンダ出身のオクム・ゴードン・ワニヤマさんが木高研の特任助教として新規に受け入れされます。

推進機構の事業をご利用下さい

1. 顧問による情報提供活動、企業経営診断

賛助会員企業からの要請を受け、推進機構の顧問が直接訪問して情報提供や経営診断を行います。また、業界団体等が主催する講演会や研修会の講師も受け付けております。

2. 技術コンサルタントによる指導

木材に関する知識及び経験を有する専門家を「技術コンサルタント」に委嘱しており、賛助会員企業の技術向上のお手

伝いをいたします。製品開発や製造工程に関する技術的なことなどお気軽にご相談下さい。

3. 依頼試験の実施

企業等からの依頼を受けて、「強度」「含水率」「接着性能」「ホルムアルデヒド放散量」などの各種試験を、木材高度加工研究所の協力を得て行っています。なお、**依頼試験の消費税率も4月から8%**となりますので、ご留意下さい。

詳細は当機構のホームページをご覧ください。